

Proust における記憶と感性

白 井 成 雄

序

《失われた時を求めて》を書くに際して、Proust が意志的記憶と無意志的記憶の区別を重視し、後者の与える回想を専ら作品の素材とした事は、Proust 自身が述べ、又多くの批評家達が Proust の言葉をそのまま引用しながら解説を試みた点である。⁽¹⁾併し、それにも拘らず、無意志的記憶を中核とする彼の精神の営みについては、諸家の論がかならずしも一致しているとはいえない。Proust 研究の初期においては、例えば Benjamin Crémieux の如く、追憶の世界、過去時の次元のみが Proust の精神生活を構成するものであったと説く⁽²⁾評者が多かった。併し、このような説は現在では皮相な説としてすでに斥けられている。皮相である由縁は、手近な論をあげるなら、平井啓之氏の優れた《プルースト論》に詳しく説かれているところだ。そして現在においては、過去時の次元と共に⁽³⁾現在時の次元、つまり感受性の機能も又 Proust の精神生活において大きな役割をはたしていることが明らかとなっている。

だが、この二つの次元の関係はどうか？ 《囚れの女》で話者はヴァントゥイユの音楽を聞きながら「真の感動を与える音楽がある精神的現実に対応していない筈はない……かくしてマルタンヴィルの鐘楼やバルベックの道の並木の前で、更に又この小説の冒頭で一杯のお茶を飲みながら感じた喜びにヴァントゥイユの楽節ほど似ているものはなかった」と述べているが、この文から判断すれば「マルタンヴィルの鐘楼」の場合の如き⁽⁴⁾現在時の感受性のもと

らす喜びと、「一杯のお茶」の場合の如き無意志的記憶のもたらす喜びが同質のものだという事になろう。言葉を代えて言うなら知覚の次元と記憶の次元とが深い親近性を持つものとして考えられているようだ。だが何故そうなのか？ 如何なる点でこの二つの喜びは同質なのか？ Proust 研究の第一人者 Henri Bonnet はこの二種の喜びを結びつけるものとして知的な要素を取入れた。彼によれば、「一杯のお茶」のもたらす喜びは、記憶の浄化作用により過去の⁽⁶⁾本質が純粋な状態で捕えられたと意識するところから生れる知的な喜びであるが、他方、「マルタンヴィルの鐘楼」を始めとする現在時の美的印象も又、言葉におきかえられる事によってその本質をきわめられるのであり、かくして無意志的追憶も美的印象も同様に吾々に事象の本質を捕えさせ、ここからどちらの場合にも同質の知的喜びが生れるというのだ。だがはたしてそうだろうか？ 無論 Bonnet の論ずる如く、Proust は神秘主義者ではなく、彼にとって知覚なり記憶⁽⁷⁾なりの与える印象が、知的認識を通して始めて完全なものとなりえた事は言う迄もない。そもそも「書く」という行為自体が、それが真摯なものである限り、己れの心の内にすでに明確な形で存している観念なり印象なりをそのまゝの形で筆に移す事ではなく、逆に、「書く」ことによって吾々は己れの印象や観念を明確に規定し、己れ自身に対してそれ等を明らかなものとしてゆくものだからだ。だから Proust の精神生活は究極において「知性」の次元で統一されるという Bonnet の論は正しい。併しこのような知性的解釈が当面の吾々の問題である「知覚と記憶の与える同質の喜び」にまで持ち込まれるのは無理な論ではあるまいか？ 何故なら、Proust の記述に従うなら、「一杯のお茶」のもたらす喜びは過去時の喚起以前に「話者」によってはっきりと感じられているからだ。この点だけを考えてみても Bonnet の論は正しくない。

⁽⁸⁾では如何なる意味で記憶の与える喜びと知覚の与える喜びは同質なのか？ 言葉をかえて言うなら Proust 精神の二大機能とされる無意志的記憶と感受性、過去時の次元と現在時の次元はどのような結びつきを持つのか？ 先に掲げた《

囚れの女》の一節に依れば、「精神的現実」という言葉の内に当面の二種の喜びが、「バルベックの道の並木」の前で感じられた喜びと共に等しく内包され⁽⁹⁾ている様に思えるが、この「精神的現実」或はただ単に「現実」というProustによって多種多様な意味に使はれている言葉が、「知覚」、「記憶」、「想像力」、などという諸機能とどの様に関係づけられ、如何なる意味を与えられているかを一応考察の目安としながら論を進めれば、当面の問題に益するところがあるのではないか？ 以下、この様な観点から論を進めよう。

(註)

- 1) この拙論で、「記憶」といえば *Mémoire* [*Faculté de conserver les idées antérieurement acquises*] を、「追憶」といえば *Souvenir* [*Impression, idée que la mémoire conserve d'une impression précédente*] を一応意味するものとする。併しこの区別は厳格には守られていない。何故ならこの様な分類自体がはなはだ観念的なもので、現実には *Mémoire* と *Souvenir* は一体となっているものだからである。だからこそ、言う迄もない事だが、*Mémoire* という語と *Souvenir* という語は上記の定義を離れて、混同して使われるのだ。
- 2) Robert Dreyfus : *Souvenirs sur Marcel Proust*, pp.287~292. なおここに再録されている Proust の書簡の要点は邦訳「スワンの恋」、IIの「あとがき」の部分に、井上究一郎氏の手によって紹介されている。
- 3) Benjamin Crémieux : *La Mémoire de Proust dans Du côté de chez Marcel Proust*. Benjamin Crémieux : XX^e Siècle, p.41
- 4) 平井啓之：ブルースト論、「ランボーからサルトルへ」中の一論文、なおこの優れた論に小生の拙論は多くの暗示を受けている。
- 5) *A la Recherche du Temps Perdu*, tome III, p.374, 同じような記述は III, p.886 にも見られる。なお「失はれた時を求めて」からの引用に際しては優れた現行邦訳に主として依ったが、一、二私訳を試みた箇所もある。
- 6) Henri Bonnet : *L'Eudémonisme esthétique de Proust*, PP.90~110. 特に § *Les souvenirs affectifs purs involontaire*, § *Le souverain bien*, 及 § *Les souvenirs involontaires et les impressions esthétiques* 参照。
- 7) Henri Bonnet : *Ibid*, pp.237~258, § *L'intellectualisme de Proust* 参照。
- 8) Tome I, p.45.
- 9) いずれ後述するがこの印象は普通「偽りの再認」と呼ばれるものである。

I 無意志的追憶の表れる箇所

論を始めるに際し、まず「無意志的追憶」という現象が《失はれた時》のどのような場面に表れているかを考えよう。古来この現象を考えるに当って、

「一杯のお茶」, 「アドルフ叔父の部屋」, 「バルベックの三本の木」, 「心の間歇」, 「《見出された時》の諸体験」等という限られた場面のみが考慮に入れられがちであった。併しこの拙論においては, 「無意志的追憶」という言葉で, 上記の言はば「特権的瞬间」, いさゝか神秘的に見える諸体験の場面のみにでなく, より多くの場面を示したいと思う。

例えば, 作品冒頭における眠られぬ夜々に続く「コンブレにおける幼時の就寝」の場面の追憶からして, 「話者」には兎角としても Proust 自身にははっきりと無意志的追憶と意識されていた等である。この事は《ジャン・サントゥイユ》の《サン・ジェルマンの夕べ》を一読すれば明らかであろう。この節で Proust は, 母が「お休みの接吻」をしに来てくれないために悩む幼いジャンの姿を描いた後に, 「こうした幼時の瞬間は彼の心の金属板に鳴りひびいたのだった。そのとき発した音は, 彼の心が固まったときには一層重々しく, ひび入ったように深みを増し, 遂にはジャン自身の音となっていくまでも残ったのである」と述べ, さらにジャンが大人となっても日頃の習慣と異った就寝の仕方をするとうとうと寝つかれない事を述べた後で次の様に説明している, 「躍起になってあすの朝のことを考えながら孤独と暗黒からのがれようとしても無駄であった。彼の幼時の魂, 眠れない子供のころの慰められない魂がきまって影のように立ちもどってきて, 彼の周囲に, 鋭い, だがなつかしい叫びを発するのだ」と。この文を考慮に入れるなら《失われた時》冒頭の「幼時の就寝」の場面の追想が, Germaine Brée の指摘にも拘らず, Proust にとって無意志的追憶の一例であった事は明らかだ。⁽⁴⁾

別の例をあげよう。《スワン家の方へ》の第三部で, 「話者」は幼年時代にジャン・ゼリゼ公園でジルベルトと遊んだ時の事を回想し, 天気が悪いと遊べなかったので朝早くからバルコニーに映える陽光に一喜一憂した事を思い出すのであるが, この追想としてこの場面の原形である《時評集》中の一文《バルコニーの上の陽光》を考慮に入れれば Proust にとって無意志的追憶と意識された事

は明らかだ。この文でも Proust はやはり《スワン家の方へ》の場合と同様、バルコニーに映える陽光からジャン・ゼリゼ時代を追想するのだが、この文の最後に次の様な重要な言葉がある、「ついで人生がもう何も喜びをもたらさなくなる日がやって来る。だがその時、喜びに同化した陽光が吾々に喜びをかえしてくれる。時のたつうちに吾々は陽光を人間化しえたのであり、陽光は最早吾々にとって幸福の追想以外の何物でもなくなるのである。そして陽光の輝く現在の瞬間と陽光が思い出させる過去の瞬間と同時に吾々は喜びを味うのだ。と言うよりかむしろ二つの時の間に、時を超えて、陽光は永遠の喜びを真に作るのだ」と。この説明は「《見出された時》の諸体験」について話者の下す説明⁽⁵⁾と同じではないか。

あるいは、筆者がこゝに掲げた誰でもが体験し得るような二例に比して、古来「無意志的追憶」の例として示されてきた「話者」の体験があまりにも特異だと思えるかもしれない。併しそれは本質的な事ではない。いずれ後に論じるが、無意志的追憶とはなる程ある外的対象や状況を媒介として喚起されはするものの、それは決して受動的な機械的な現象ではなく、主体の生命の積極的な営みなのである。そして上述の二例と古来から例の違いは現実の外的状況——例えば「バルコニーの陽光」とか「一杯のお茶」——と、喚起される世界——「バルコニーの陽光を気にしていた幼時の己れの姿と、公園で女友達と遊んだ楽しい日々」とか「幼年時にコンブレで過した生活」——との間に存する関係が強いとか弱いとの差に帰せられてしまうのである。そして関係の弱い場合は関係の強い場合に比して、主体の生命の積極的干与がより強いというだけの事であり、本質的な差異はないのだ。

⁽⁶⁾

要するに作者 Proust の立場からすれば《失われた時》は無意志的追憶、特権的瞬間で満ちている。ただ「話者」はこの事実にあまり気づかないのであり、それ故に又無意志的追憶という現象が「話者」によって正面切って取上げられる事も少く、吾々に説明される事も少いのだ。いや、「思い出される話者」に

せよ「想いだす話者」にせよこの事実にあまり気づかないというだけではない。気づいてはいけない場合だってあるのだ。例えば《時評集》における上述した Proust の言葉を、《スワン家の方へ》で「思い出す話者」が口にする事は許されない。それは《見出された時》に到るまで許されないであろう。その様に作者によって「話者」はあやつられているのだ。だから Proust の精神の営み⁽⁷⁾を対象とする吾々は「話者」の立場にこだわる必要はないのである。⁽⁸⁾

(註)

- 1) Tome I, pp.9~43
- 2) Jean Santeuil tome I, p.70 なお井上・島田・鈴木氏訳を借用した。
- 3) Ibid. p.71
- 4) Germaine Brée : Du Temps Perdu au Temps Retrouvé, p.78
- 5) Chroniques : p.104
- 6) あるいは人は「歡喜」をもって古来からの「無意志的追憶」の場面の特質とするかもしれない。併しそれは当らない。何故なら「心の間歇」の場面に「歡喜」は存しないではないか。
- 7) だからこそ、《失われた時》は冒頭と結末が一致する円環的小説だとする通説は Brée の論する如く誤りである。cf. Brée : Ibid. p. 27
- 8) なおこの作において作者の介入が一番はつきり表れるのは「比喩」を述べるという形を取ってである。この事は冒頭から明らかだ。

II 「現実」と「追憶」

さてこの様な広い意味での「無意志的追憶」と「精神的現実」との関係はどうか？ まずテキストを掲げよう。《スワン家の方へ》で「話者」は次の様に回想する。「……だが、私はメゼグリーズの方やゲルマントの方のことを、心の地盤の最深層、いまなお私のよりかゝる、堅固な地盤と考えるではない。この両方の道で知った物や人だけが、今でも私にとって真実なまじめな存在のように思われ、喜びの種であるわけは、その両方の道を歩き廻っていた頃に、私がそうした物や人を信じきっていたからにはほかならない。創造する信念が私のなかで涸れはてしてしまったためか、それとも現実が記憶のなかでしか形成されないためか、今日、初めて眼にするような花は、私にとっては、真実の花ではないような気がする」と。⁽¹⁾

さて「現実」は「記憶」のなかでしか形成されないと説くこの件りにおいて、逆説的ではあるが、Proust が「記憶の内に存する世界はすべて現実を構成する」とは言っていない事に注意せねばならない。「今日初めて眼にする花」のみが「真実の花でない」だけではない。昨日見た花でも、幾年か前に見た花でも「真実の花」と思えない事もある。つまり追憶の世界が「現実」を構成するためには、まず第一に、その世界が実際に生きられた時「信じられる」必要があるわけで、言いかえるなら過去において意識的にせよ無意識裡にせよ密度高く生きられた世界のみが Proust の精神的現実を構成する素材となりえ、Proust の現在の精神をなおも惹きつけるのだ。それは少年時代に親しんだコンブレの自然であり、シャン・ゼリゼ公園で愛したジルベルトであり、又バルベックの海と乙女達、ゲルマント家を中心とする社交界と同性愛の世界、それにアルベルチヌへの恋と苦悩、更には芸術の世界でもあろう。Proust は己れの作品のあまりにも細かな描写をある評者から非難された時、その的外れな非難を歎いて、「私の作中人物は誰一人として怨を開けたりなぞしません」と答えた事があるが、Proust は己れの生命に強く結びついた世界は徹底的に知る必要を感じた代りに、自余の唯単に些細な事象、自己の生命に深い結びつきを持たなかった事象は全く顧みなかったのだ。この事は必然的に Proust をして客観的、外的対象を知るという道よりも、己れを知るという道へと進ませるであろう。自分がかって「信じきった世界」を知るという事は、且って生きた外的世界を記憶の内に捕えるという事を一方で意味するのは無論であるが、それと共に、その世界を己れにとって重要ならしめその世界を媒介として自分自身に明らかにされた己れの生命それ自体を知るという点にこそ重点がおかれる事は明らかだ。Proust は次の様に言う、「吾々は諸事物のなかに、吾々の精神がそこに投げかけた反映を探し求めようとするのだ」と。かくして「追憶」の内に求められる「現実」とは過去の「物」や「人」であるよりは、この

(2)

「物」や「人」に対して抱いた「信頼の気持」、「己れの精神の反応」そのも

のだといえよう。例えば、幼年時の読書を語ろうとするたびごとに、Proustの筆が、幼時の読書そのものではなく、読書に結びついた幼時の豊かな精神的感情生活を描く事になってしまうのも、この事を考えれば十分納得がゆくであろうし、又、Proust が自然を描く時印象主義風になるのも同じ理由からであろう。併し、この「現実」を何故 Proust は「追憶」の内に求めるのか？ この「現実」が、その根本において己れの生命の発露というようなはなはだ現在時的性格を持っているのに、その「現実」を何故 Proust は過去時の次元に求めるのだろうか？ その理由はこの「現実」が「客観的現実」ではなく「精神的現実」だというその点にまさしく存する。吾々は己れの本質を直接的に把握する事は出来ない。それは外的状況を媒介とし、その状況と一体となって発露されるものなのだ。だがその場合でもなお、この生命の発露が、まるで物質的に決定された不動の客観的対象の如く、吾々の意識により直ちに、決定的に把握されるという事は少い。吾々の本質は、生命の昂揚の繰返しの中に、徐々に吾々に意識されるのであり、更に又昂揚の瞬間から一步退いて、この瞬間における外的対象と吾々の精神的反応に記憶の内で慣れ親しんでこそ捕えうるものなのだ。この事実を Proust は次の様に述べる、「私は自分自身の奥底にあるものに、現実のなかで到達することの不可能なのをあまりにもこれまで体験してきたのだった。……私が動かぬものにしっかりとどめようと考えていたそんな印象は、直接その場に臨んで触れる段になってみると、ただ消え失せてしまうばかりで、うまく引き出すことが出来なかった。そんな印象を、よりよく味うただ一つの方法は、その見出される場所、即ち私自身のなかに於いて、もっと完全にそれに馴染み、その奥底まで明るくするように努めることだった」と。

(4)

以上を一応まとめるなら、Proust 的「現実」が形成されるためには、まず第一に彼が己れの生命を激しく燃やしたという事が前提となり、ついでその「現実」とは燃やされた生命の「対象」であるよりも、その「対象」を媒介として明らかにされた己れの生命それ自体であり、そしてその生命は己れの本質を

明らかにするために「追憶」の世界でなじまれる必要があるのだ。スワンの次の言葉は以上の「現実」の定義を具体的且つ集約的に示している、「……もうそれらのこと〔以前恋をしていた時の色々なこと〕に執着しなくなってからも、そこに執着したということは絶対にどうでもいいというわけではない、というのはそれは他の人々にはわからない理由のためだったからだ。そういう感情の記憶は吾々の中だけにあることを吾々は感ずる、それを眺めるには吾々の心の中に入って見なくてはならない……」と。

(5)

だが、Proust 的「現実」が一応はこのように考えうるとしても、この「現実」が、この節の冒頭に掲げた文に見られる如く、「話者」にとって「今でも真実なまじめな存在と思え、喜びの種であり」、又、スワンにとっては、過去の感情の記憶が今でも「絶対にどうでもいいという訳ではない」ものである以上、過去時における Proust の生命の発露や過去の感情に関する記憶が現在時の彼の生命にも秘かな関係をもつものでないかとは十分想像されうる点だ。つまり Proust 的「現実」は単に記憶の次元と結びつけてのみ解さるべきではないのだ。あるいは、言葉を代えて言うなら、Proust 的「追憶」そのものが、吾々が常識的な意味で考えている追憶という現象——つまり過去の体験がそれ自体で充足して現在時の主体の生命とは直接関係なく回起される——をはるかに超えるものなのではなかろうかと考え得るのである。だがこゝで節を改めよう。

(註)

- 1) Tome I, p.184
- 2) Tome I, p.87
- 3) Cf. Journées de Lecture dans Pastiches et Mélanges, Jean Sauteuil. tome I, pp.172~188
- 4) Tome III, p.877
- 5) Tome II, p.703

III 「現実」と「想像」

前節の結論から吾々は直ちに Proust の「現在時」に言及すべきかと思える

が、併しその前に本節では、識者によってよく問題とされる Proust における「想像力」の問題をとりあげて、彼の言う「想像力」とは如何なる機能を持ち、又如何なる位置を Proust 的「現実」において占めるかを明らかにしておきたい。何故なら、この点を明らかにする事は吾々の論を進めるに当って決して無益なことではないからだ。

さて Proust における想像力が、未知の世界、未来時を指向するという常識的な意味での機能の他に、過去を美化するという機能を持ち、そして前者の機能よりも後者の機能が重視されるべきであるとは平井氏により鋭く指摘された点である。だが拙論を進めるために、又論述の方法において氏の論と少々異なる点もあるために、以下このすでに指摘された正論を自分なりにもう一度繰返そう。

《失われた時》を手にした読者は、幼い「話者」の夢想がどれ程激しく未だ見ぬ人、見ぬ土地に向けられるかをいやという程知らされるであろう。Proust は《失われた時》を出版するに当ってその第一巻を「名の時期」と題したいと考えた時もあったようだが、幼い話者の想像はまさしく「名」を己れの想像力が働きかける母体としながら、幻想的な世界を構成するのだ。これは何も幼い「話者」にのみ言はれる事ではなく、成人した「話者」にも共通する現象であり、言いかえれば Proust 自身の運命でもあったのだ。《ソドムとゴモラ》で「話者」は自分が嘗て愛した幾人かの女性を思い出しながら次の様に反省する、「現実性の大部分が私の想像力のなかに存する幻影や人々しか追い求めない事が私の運命だった」と。そして、事実《失われた時》は未知の世界に投げかける「話者」の想像とその幻滅とで満ちているのである。

このような「話者」の——ひいては Proust の——性格にも拘らず、何故吾々は未来を指向する想像力を問題としなくてもよいのだろうか？ それは普通言はれる如く、己れの過度の想像力のため、実人生において Proust がいつも幻滅を味わい、そのため未知を指向する想像力の機能に彼が信をおかなくなった

からではない。想像力過剰というような個人の生命の本質を形成する機能は、たとえその機能のために絶えず彼が幻滅を味い、又その機能に信をおかなくなったとしても、やはり彼の内において働き続けるであろう。それ故、一個の人間としての Proust を全体的に問題とするにあたっては、これはなんといっても重視されねばならない機能だ。だが作家としての次元からこの問題を考えれば問題は少し違う。作家としての彼は、「実人生によって内心に刻み残された思想は、どんな思想であろうとも、それらの具体的な形象、即ち印象の痕跡があくまでその思想の必然的真實性を保証する」と述べて、この様な具象的真實性⁽³⁾に裏打ちされた思想のみを作品に定着せんと願ったのである。そしてこゝに未来を指向する想像力が Proust にとって問題にされなかった理由が存するのだ。つまり、更に Proust の主観に近く立ってこの事を言いかえれば、吾々は前節で Proust 的「現実」を構成する原因として「彼の生命の発露」という点をあげたが、未来時とは己れが未だ存しない次元であり、己れの自我が外的対象と出会って発露されない次元である故に問題とされないのである。そしてこのような未来を指向する想像力の働きは、その働きが過去の彼の人生においてもたらした悲喜劇と共に、彼の生命の発露として回顧的に作家としての Proust に重視されるにすぎないのである。そしてこゝから、未知の世界への「話者」の憧れと幻滅に満ちた《失われた時》全体が、作家 Proust にとっては過去時の昇華として捕えられているという現象が生れることになる。

(4)

さて未来を指向する想像力を重視する必要がなくなった今、過去を美化する想像力に焦点を合はし、この想像力の本質が如何なる点にあり、又、Proust 的「現実」において如何なる位置を占めるかを明らかにしよう。まず《囚れの女》からテキストを掲げよう。

「アルベルチーヌの遠出に随いて行かなければ、私の心は却ってひろびろとさまよいでる。この朝を感覚によって味わうことを拒否すれば、これと同じあ

らゆる朝、過ぎ去った朝、可能な朝を想像のなかに楽しむのである。もっと正確に言えば朝の一つの型を楽しむのであり、同じ種類のすべての朝はこの型の間歇的な現れにすぎず、しかもその型の朝を私はすぐさまそれと認めたのであった。……この観念の朝は、このような凡ての朝々と同一な、永遠の現実で私の精神をみたし、病気の状態にもめげぬ歡喜を私に伝えてくれるのだった⁽⁵⁾と。この文は全く重要であるが、吾々はこの文を二つに分けて解釈しよう。

1) まず吾々はこの文で「知覚界」と「想像界」とが対立的に考えられている事を知らされる。知覚と想像力とが意識の異った二つの型であることは Sartre が十分論証した点であるが、⁽⁶⁾ Proust も又内省的直観でこの事実を知っていた。つまり知覚意識は知覚対象と強く結びつき対象に没入するものである⁽⁷⁾故に、アルベルチヌについて遠出に行けば「朝」を感覚的に、断片的にしか味わえず、心が広々とさまよいでて、想像力が自由に発露される事が不能となるわけだ。だがそうはいうものの、吾々はこの点をより正確に論じるために更に引用を重ねねばならない。

幼年時に夏休みを過ごしたコンブレの自分の部屋を追想しながら、「話者」は《スワン家の方へ》でこう述べる、「そんな部屋のはの暗い涼しさと街頭の日向との関係は、さながら影と光との対照であり、言葉をかえていえば、はの暗い部屋の涼しさは、街頭の日向同様に明瞭で私の想像力に夏の光景を十全に伝えてくれるのであるが、これがもしも私が散歩に出ていたのであれば、私の感覚は断片的にしか夏の光景を楽しめなかったにちがいない」と。状況は先の引用文と全く同じだ。そしてこゝで注目すべき事は「話者」が夏の光景に結びついている「はの暗い部屋の涼しさと街頭の日向」を感覚で味わっているという点であり、このような意味においては先の引用文の箇所においても「話者」が「朝の感覚」を実際に味わっている事は疑いえないのである。この《囚れの女》からの引用文のすぐ前に吾々は次の様な言葉を見出す、「喜びを味わ

おうとする自分勝手な欲望——気まぐれな、純粹に私ひとりの気持だけでは、喜びを手近かに引寄せることはできなかったろう。そのためには、その時々の特異な天候が、こうした喜びの過去の追憶を私の心に呼びさましてくれるばかりでなく……喜びの実際の存在をはっきり告げてくれなければならないのである」と。

(9)

この点は見逃されてはならない。人間は言うまでもなく全く受動的に感覚の世界を受入れるわけでもなければ、又逆に想像的意識が外界と全く独立して恣意的に働くわけでもない。如何なる場合においても、吾々の意識とは感覚の次元と想像の次元——言葉を変えれば吾々を取巻く外界と、物質的決定から解放された吾々の内的生命——とが互いに作用しあい、融合しあっている世界なのだ。「一杯のお茶」を始めとする幾度かの特権的瞬間も何等かの意味において外的媒介を必要とした如く、上に引用した「話者」の想像的意識も又それを取巻く外的状況なしには起りえなかった事は明らかである。そして特に Proust の如き感性の豊かな人間にあっては、想像界も無論大切ではあるが、それを背後から支える程度において知覚界も又必要であったとは言い得るであろう。

2) さてこの様に知覚で支えられている彼の想像力は過去に向けられる。なる程文中に「可能な朝」なる文句が見出されるが、この「朝」は「過ぎ去った朝」と同質な朝である以上、「想像の内で楽しまれる可能な朝」とは完全に未知な、恣意的な朝ではなく、少くともそれと同質な朝が過去において十分体験されている朝なのだ。この文の重点が「過ぎ去った朝」におかれている事は明瞭であり、ここで Proust の使う「想像」という語を「記憶」という語におきかえてもおかしくない事は明瞭であろう。言葉をかえて言うなら、Proust 的想像力とは人間精神の恣意的な自由性を端的に示すものとして考えられている Sartre 的想像力とは異なるのである。Sartre 自身こう述べる、「追憶の定立作用とイメージの定立作用との間には本質的な違いが存する。もし私が過去の生活の一事件を想起するとすれば、私はそれを想像するのではなく、それを

憶い出すのである。すなはち私はそれを不在の所与 (donné-absent) としてではなく過去における現実の所与 (donné-présent au passé) として措定するのだ」と。そして Proust における想像界が donné-présent au passé を特質と⁽¹⁰⁾し、自分の想像に浮ぶ世界が過去に実際に存したという深い実在感を特質としている事は明らかだ。

では何故こゝで「記憶」という言葉が使はれないのか？ この点は Proust にとってはあるいは言葉の問題でしかなかったかもしれない。併しあえていうなら、「記憶」が常識的にはある特定の時間的空間的な枠を持った事象を喚起するものであるのに反し、今の場合想像の内に楽しまれる世界がこの種の枠から解放された「朝の一つの型」、多くの「朝」に共通する「朝の本質」というふうに考えられる性質のものだからである。そして元来自然現象間に類似性は存するとしても、「朝の一つの型」というものは Proust の感性がそうと認めてこそ、その様な「共通性」が多くの朝の間に認められるもの故、「想像の内に楽しまれる朝の本質」とは過去から現在に到るまで変る事なく続き、時に応じて無意識裡に、間歇的に発露される Proust の根本的感性の一形式だと考えられよう。

この点は重要だ。吾々は前節で Proust 的記憶が感情の記憶であることを述べたが、感情の記憶であり己れの生命の発露の回帰であるというまさにその理由により、この記憶は過去のある特定の客観的事象に結びつくことなく、常識的な意味での記憶の枠を超え、彼の感性の一形式の発露せる諸瞬間を内包するのである。だからこそ先にあげた引用文で「話者」は凡ての朝に共通な「永遠の現実」を感じるのであり、そしてこの「永遠の現実」とは Proust の根本的な自我の発露に他ならないのだ。

以上を要するに Proust 的「現実」とは単に前節で述べた如くある過去時における自我の解放にとどまらず、その自我は時間的空間的な枠をこえて発露される彼の変らざる自我の一形式なのである。そしてこの自我の発露が現在時において回帰的に捉えられる際、その回帰をうながし支えるものとしての役を現

在時における知覚界が演じるのだ。

だがはたして、過去時の生の昂揚のよみがえりにおいて、現在時はこのようなただ補助的な意味をしか持たないのだろうか？ 以下この点を考えてみよう。

(註)

- 1) 平井啓之：上掲書「プルーストの世界における想像力」の項参照。
- 2) Tome II, p.1012
- 3) Tome III, p.880
- 4) なお概して想像力の豊かさを説き、知覚世界において己れの精神の働きがにぶるのを嘆いた Proust が、ある箇所、土地の名をもとにしてその土地を己れの想像力が美化することを述べながら、「尤もこうした心象は確かに現実をあざむくものだった。というのは心象がいきおいひどく単純化されねばならなかったからだ。なるほど私は自分の想像力が切望したもので、しかも私の感覚が直接の喜びを味わわずに不完全にしか感得しなかったものを、名という隠れ家に匿まいはした。そしてその隠れ家に夢を積み重ねておいたから、そうした名も今私の希望に磁力をつけてくれるのだろう。しかし土地の名そのものには大した包容力があるわけではない。そのなかへはせいぜい町の主だった二三の名所旧蹟が容れられるだけなのだ」と論じて Sartre 張りの知覚の豊かさと想像力の貧困さを書きとめているのは注目に値する。(cf. Tome I, p.389)
- 5) Tome III. p.26
- 6) cf. Sartre : Imaginaire
- 7) といって知覚意識は客観的対象によって全く左右される受動的なものでは全然ない
- 8) Tome I. p.83
- 9) Tome III. p.25
- 10) Sartre : Ibid. p.230

IV 無意志的追憶と現在時

(1)

多くの評者は Proust の言葉に即して、無意志的追憶においては現在時におけるある感覚が——それは「一杯のお茶」を飲むことであるかもしれないし、又前節の例でいえば「話者」の知覚する「朝の感覚」であるかもしれない——それと同じ過去の感覚とこたましあい、それと共にその感覚に結びついた過去時の全生活がそっくり浮び上るのだと述べる。だが、はたしてそうだろうか？ Proust

的追憶における現在時とは「現在における外的状況の感覚」をしか意味しないのだろうか？ この様な考えは外的感覚に重点をおきすぎた機械論的解釈ではなかろうか？ 更に又過去時の生活がそっくり浮び上るといふ様な考えは、記憶にのぼる過去時を変える事のない即自的存在として考えているという欠陥を持たないであろうか？ 無論 Proust 自身の内にこの様な解釈をなさしめる要素が⁽²⁾無いわけではない。例えば「一杯のお茶」のくだりにせよ、《見出された時》の諸体験の箇所⁽²⁾にせよ、このような機械論的解釈を許す要素をたしかに孕んでいる。特に Proust が己れの体験を理論的に説明する点においてそうだ。併し、少し見方を変えれば又別の解釈が許されるであろう。Beauvoir は次の様に言う、「Ribot の弟子としての Proust は退屈だ、彼は吾々に何も教えるところはない。しかし真正な小説家としての Proust は、彼の同時代の理論家が誰一人としてそれと等しい抽象的理論を提出しなかった真実を発見するのだ」と。吾々も又 Proust が己れの意識を理論的にではなく、小説家として忠実に捕えんとした部分を問題とせねばならない。⁽³⁾

まず吾々が注目すべき事は、「一杯のお茶」のくだりにせよ、《心の間歇》の章にせよ、又《見出された時》の諸体験にせよ、普通言はれる如く、現在の外的感覚がまず引き起こすのは、絶対に過去時の同種の感覚ではないという事だ。この点は今迄あまりにも見逃がされてきた。テキストを見れば明らかな如く、「一杯のお茶」を飲んでまず最初にもたらされるのは「なんとも言えぬ快感」であり、「力強い喜び」なのだ。又、《心の間歇》において「話者」は半長靴の最初のボタンに手を触れた途端「何か知らぬ神聖なもののあらわれに満たされて胸はふくらみ、嗚咽に身をゆすられ、どっと眼から涙が流れる」のだ。更に又《見出された時》において敷石につまづいた「話者」は、まず「大きな幸福感」に満たされる。つまり現在の感覚がまずもたらすのは過去時の同種の感覚でもなければ、又それに伴う過去時の回帰でもない。そうではなくそれは純粹の現在時に属する喜びであり悲しみなのだ。そしてそれに続いて喜⁽⁶⁾

びや悲しみに満ちた過去時が喚起されるのだ。この拙論の序においても指摘しておいたが、「一杯のお茶」のもたらす喜びは「過去時の本質が喚起された」という知的意識から生れるのではない。《見出された時》の諸体験についても同様だ。そうではなくテキストに忠実に従うなら、現在時の喜びこそが過去時の同質の喜びを喚起しているのだ。《心の間歇》の中に「喜びや悲しみの入っている感覚の杵が再び捕えられると、こんどはその喜びや悲しみは相容れない他人を凡て排斥して、ただ一つその感覚を生きた自我を吾々の内に定着する力を持つ」という文があるが、この文こそ他の如何なる説明にもまして Proust⁽⁷⁾ 的追憶の本質を述べた文であろう。感覚が感覚を呼ぶのではない。現在時の生命の発露こそが主導権を握り、過去時における同質の生命の発露を呼びおこすのである。無意志的追憶という言葉は一見すると主体の生命が受動的な状態にとどまっている事を意味するかに見える。併し、それは理智的意志が働いていないという意味でのみ受動的であるにすぎない。吾々のより根源的な生命は活潑に活動をしているのだ。

だがそれにしてもこの現在時の感動をひきおこすのは「一杯のお茶」を飲んだり、「靴のボタン」に触れたり、或は「鋪石」につまづいたりするという外的感覚ではないか。一体この様な些細な外的感覚が何故突如として生の躍動を持ち来たらすのだろうか？ このような疑問は吾々に自然におこるものであろう。だがはたしてこの様な疑問は正しい問いの仕方であろうか？あるいはテキストの読みの浅さから生れる問いではあるまいか？吾々はもう一度テキストに戻ろう。

「一杯のお茶」の箇所はあるいはこの様な疑問を正当化するかもしれない。だが《心の間歇》において靴のボタンに触れる前の「話者」の心的状況を示す次の文はどうか？「夜がくるのを待ちかねて、疲労のために心臓の動悸が激しく打って苦しいのをやっと抑えながら、ゆっくりと用心深くかき込んで私は靴をぬぐうとした」と。更に又、《見出された時》において特権的瞬间を感じる前の「話者」の状態を説明した、約10頁ばかりの今迄あまりに不当に見過ごされている文⁽⁸⁾
⁽⁹⁾

はどうか？吾々はこの箇所の中に次の様な重要な言葉を見出すであろう。長く療養生活を続けていた「話者」は久し振りにパリの自宅に戻るが、そこにゲルマント大公邸からの招待状を見出す。「この（ゲルマントという）名はずいぶん久しく私の頭からそれていたために、招待状で読んだ時、私の注意の領域を目ざめさせ、嘗てこの名を取り巻いていた公領の森だとか高貴な花だとかいった心像のすべてを伴って、記憶の底にまずその過去の一断面を切りに行き、（嘗て私が覚えていた）あの名に対する魅惑と意味とを、私のために再び取り戻してくれたのである。……私はゲルマント家へ行きたくなった。宛も自分の幼時やその頃のことが見える記憶の深い奥底に近づくことができるかのように。……私はでかけるために馬車に乗った……車はシャン・ゼリゼに通じる路を通らねばならないという好都合をもたらした。そのころこの辺の街路の舗装はひどく悪かった。だが一たび車を乗り入ると、……何ともいえないやわらかな感覚が湧き起ってきた。……この時私の通っている路は嘗てフランソワーズとシャン・ゼリゼに行くときにとったあんなに久しく忘れていた路だった。……私は静かな追憶の高空へ緩やかに昇っていった。……ゲルマント大公妃邸につく少し手前で私は車からおりた……習慣からぬけ出て、違った時間に新しい場所へ出てくるいつものように、私には或る生き生きした喜びが感じられた……」と。つまり《心の間歇》の場合もこの《見出された時》の場合も、先に記した特権的な感覚が「話者」にもたらされる前に、「話者」の心はすでに常とは異った昂揚を示し、又過去時を喚起しやすい状態に置かれているのだ。ある外的感覚が吾々に現在時の喜びをもたらし、それと共に過去時が喚起されるのではない。そうではなく吾々の内的精神の昂揚こそがこの特権的な現在時の外的感覚を見出させるのだ。そしてこの外的感覚はこの現在時の内的昂揚を完成させるための媒介でしかなく、更に又この昂揚が己れ自身の本質をより明らかにするために、過去時の同質の瞬間を自然に喚起する際の媒介でしかないのである。仮に「一杯のお茶」を飲まなかったとしても、又仮に「靴のボタン」に

触れなかったとしても、その時における別種の外的感覚が同じ役割をはたしたのではないかと十分想像出来ることだ。無論 Proust 自身はこの「一杯のお茶」等々の外的感覚をかけがえのない特権的なものとして筆を進めている。だが己れの体験を理論的に説明するに際して Proust は当時の旧弊な哲学に災いされて、外的感覚に重点をおきすぎたきらいはなかったろうか？ GUSDORF は Proust 自身も問題としているコンブールにおける Chateaubriand の無意志的追憶の例をあげ、Proust が Chateaubriand のこの体験において「つぐみ」のはたす役割を過大視している事を指摘し、前後の文から判断すれば仮に「つぐみ」が来なくてもその時の他の外的状況が Chateaubriand に無意志的追憶の体験をなさしめた事は明らかだと主張している。要するに現在時における主体の「内在性の優位」こそが無意志的追憶の根本をなすものと言わねばならないのだ。

そしてこの「内在性の優位」という事は吾々が第1節で示したような広い意味での無意志的追憶に一般的に適用されるであろうが、しかし古来から使われている狭い意味での無意志的追憶の場面により一層適切にあてはまるであろう何故なら先にも記した如く、後者のいわゆる特権的瞬間と言われる場合の方が現在時における外的状況と追憶される世界との間に存する断絶がより大だからであり、つまり主体の積極的干与がより大だからである。人はよく「一杯のお茶」なり「舗石でのつまづき」なりの些事が何故豊かな過去時を「話者」に想い出させるのかと訝り、これを神秘的な体験だと考えた。併しこれは誤まった訝り方だ。常人にとって真に神秘的なのは、このような些細な外的感覚を媒介として過去の豊かな感情生活を喚起する現在時の Proust の昂揚せる生の営みの方だと言わねばならないのである。

そして一言附加するなら、Proust 的追憶がこのように現在時の情動を基にした過去時の情動の喚起である以上、ある時間的空間的な枠に規定された過去時の客観的事象がそっくりそのままの形で喚起されることは Proust にとって

必要な事ではないし、又あり得もしまい。現在時の Proust の生命の要求はこのような枠を打ち破り、己れの要求に応じて、無意志裡に過去時の世界を變形するであろう。だからこそ無意志的追憶は想像力と呼ばれる可能性を持っているのである。そしていわゆる「時を超えた」という Proust の体験は時間的秩序を問題としない本質的・自我の共鳴から生れるものなのだ。

今や吾々は前節末で示した Proust 的「現実」のもつ意味にいさゝかの補足を加えねばならない。つまりこの「現実」の真の根源は現在時の外的感覚でもなければ過去時の生の昂揚でもなく、それは現在時における Proust の生命の発動なのであると。

(註)

- 1) この節は全体として Georges Gusdorf : *Mémoire et Personne*, 2vols. (1951, 52. P. U. F.) の意見に依る所が大である。この500頁を超える大著は無意志的追憶を人間生命の根源を表はすものとして捉え、これに深い解釈を加えて余すところがない。
- 2) このような解釈をしている一例としては Henri Bonnet : op.cit., pp.101~103
- 3) Simone de Beauvoir : *«Littérature et Métaphysique» Temps Modernes* mars 1946, p.1158. cité par Pauline Newman : *«Marcel Proust et l'existentialisme»*, p.125
- 4) Tome I, p.45
- 5) Tome II, p.755
- 6) Tome III, p.866
- 7) Tome II, p.757
- 8) Tome II, p.755
- 9) Tome III, pp.856~866
- 10) cf. Gusdorf : Ibid. p.86. この箇所だけでは Gusdorf のこの論も納得しにくいかもしれないが、この書全体を読めば彼の論の正しさは理解されうる。
- 11) cf. Gusdorf : Ibid. pp.221~233

V 結 論

さてこの様に無意志的追憶という普通は専ら過去時の次元を指向すると考えられている機能が、実は、はなはだ現在時的な特性を持つものである事が明らかとなった今、吾々は敢えて「話者」の感受性が専ら現在時の次元において発露

されている場面を幾つもあげて両者の共通性を論ずる必要はあるまい。Proust
 自身が知覚の次元と追憶の次元の共通性を感じ、これを幾度も口にしている。
 例えば次の如く、「そうした（無意志的）追憶の再生という事を考えたあと
 で、私は気づいた、不分明な印象もまた別に、時どきこの無意志的追憶と同じ
 風に、すでにコンブレでゲルマントのほうを散歩したときに、私の思想を誘い
 だしたことがあったということ」と。かくして又、この拙論の冒頭で引用し
 た「話者」が述べる同じ様な意味の言葉、⁽¹⁾「真の感動を与える音楽がある精
 神の現実に対応してない筈はない……かくしてマルタンヴィルの鐘楼やバルベ
 ックの並木の前で、更に又この小説の冒頭で一杯のお茶を飲みながら感じた喜
 びにヴァントイユの楽節ほど似ているものはなかった」の意味も明白と言わ
 ねばならない。つまりマルタンヴィルの鐘楼の場合の如き⁽²⁾現在時の純粹知覚、
 バルベックの三本の並木の場合の如き知覚とも追想ともつかない言わゆる「偽
 りの再認」に似た体験、更に又「一杯のお茶」を始めとする無意志的追憶の諸
 体験、これ等表面的には異なる心的機能の発露が同質のものとして「精神的現
 実」の下に収められるわけは、いずれの場合にせよ、記憶とか知覚とかいう常
 識的には客観の対象を指向する機能の底に、⁽³⁾現在時における自我の解放が共通
 してひそんでいるからである。過去時は現在時の次元からかえりみられ、記憶
 の次元は感受性の次元へと結びつけられる。そしてこの底を現在とか過去とか
 という時間的秩序に捕われない自我の本質の発露が流れ続けているのであり、
 そしてこれこそが Proust の「精神的現実」の根本となる要素なのだ。ただ違
 うのは、この自我の解放がマルタンヴィルの鐘楼の場合のように現在時におけ
 る外的対象と直ちに結びついてそれ自体で充足するか、或は又、己れの本質を
 より明らかとするために無意志裡に過去時に同質の自我の解放せる時を求めて
 成功するか、又は「三本の木」の場合のように失敗に終るかという点で違いが
 でてくるだけなのだ。そしてこの違いはこの諸体験に共通する生の昂揚に比べ
 ると決して本質的なものではないのである。

無論だからといって、吾々は記憶の持つ意味を否定しさるというわけでは全然ない。先にも述べたが、己れの抱いた印象、体験の真の意味は、類似の印象、体験を繰返し、それに親しむことによって捕えうるものであり、マルタンヴィルの鐘楼のような場合は実に稀な例なのだ。更に又、記憶の次元とは、現在という一時的でもあり日頃の習慣に仕える己れの表面的自我の働き安い場でもある次元を超えて、己れの本質を吾々に探求せしめやすい場ともなるであろう。ただ吾々が注意せねばならないことは、記憶の世界に探求される過去時の己れというものが、もし意志的記憶、理智の記憶で求められるものであるなら現在時の吾々の本質的生命にとって何の意味も持たない干涸びたものにすぎないという事だ。そして逆に、無意志的追憶という現在時の生の昂揚が喚起する過去時こそ、この生の昂揚の本質的な呼応によって、吾々に己れの本質を知らしめる事となるのである。かくして「失われた時を求める」ことは、なる程己れの過去時の探求ではあるが、その過去時は現在時の己れにとってなおかつ意味を持つ次元でなければならず、現在時の生の欲求こそが喚起する過去の世界でなければならないのだ。だから「失われた時を求める」ことは再び時を失うことではなく、現在時の探求ともなり、更に又永遠の自我の探求ともなるであろう。

なお一言附加するなら、以上の様なわけだから、Proust の精神生活が過去時においてのみ成立するという多くの意見が誤りである事は言う迄もないし、又、Bonnet の意見の如く、「無意志的追憶」と「知覚」の次元に存する感受性とを平行的に論じ、「知性」の次元でこの二つを融合しようとする意見も誤りだと言わねばならない。この二つの機能は「知性」と言う様な生命の上部構造においてではなく、生命のより根源的な次元で結びついている事は明かだと言わねばならないからである。

さて、吾々は序において Proust の使う「精神的現実」或は単に「現実」という語に注意を払いながら論を進めようと述べた。それにしてはこの拙論でこの種の語をあまり問題としなかったと言われるかもしれない。併し、この拙

論は「現実」という用語の統計的研究をもともと目指したのではないのである。この語は論を進める上での一応の指針であり、真の問題点は序にも掲げ、結論にも又引用した《囚れの女》の一節の解釈を通して、記憶と感性の関係という Proust の精神構造の一問題点を明らかにせんとした点にある。そしてこの点は吾々にとってすでに明らかとなったであろう。

〔附 記〕

なお Proust 的「現実」がかくの如く主体的な生体験であり、それ故己れの精神のみがこれを対象化して知りうるものである以上、この「現実」はマルタンヴィルの鐘楼の場合にたんに表われている如く、⁽⁵⁾「創作」という段階を⁽⁶⁾通して始めて真に完成した意味を持つてくることは言うまでもない。又この故にこそ、今迄述べた諸体験は「精神的現実」なる語の下にヴァントゥイユの音楽という芸術作品に止揚されるのである。《見出された時》で「話者」はこう述べる、「これら私の語った数多くの感覚は、この（ヴァントゥイユ）の七重奏に綜合されているように思われた」と。そして「現実」と「創作」とか⁽⁷⁾「芸術」とかの関係は《失われた時を求めて》で実にしばしば論じられるので⁽⁸⁾あるが、この点は吾々のテーマと異なるので省略する。

(詰)

- 1) TomeⅢ p.878 なお文中の「不分明な印象」とは幼い「話者」がゲルマントの方を散歩している時、石や草むらや木々を前にして、何とも言えない恍惚感にひたる時の印象を指している。TomeⅠ p.719 では「三本の木」と上述の不分明な印象及び無意志的追憶の類似が同様に説かれている。
- 2) TomeⅢ p.374
- 3) 但し幼時の Proust 自身が、作中の「話者」の如く、イリエ近郊の鐘楼を見て感じた喜びを書きとめておいたか否かは疑問の余地がある。恐らく喜びを感じた事は事実であろうが、それを文にはしなかったのではあるまいか。何故なら Painter の指摘するところではこのマルタンヴィルとヴィエヴィックの三つの鐘楼の描写は、その現実のモデルである筈のマルシェヴィルやヴィエヴィックの鐘楼の実際の位置関係と合致せず、むしろ Proust が1907年にカーンで体験した筈のカーンの鐘楼の位

置関係と合致するとの事だからである。だが兎角「矢はれた時」の他の諸場面から考えても、Proust の現在時における感受性の機能が人並みはずれて強いものであった事は明かだ。cf. George Painter : Marcel Proust vol. I, pp.30~31.

- 4) 「三本の木」の体験を言はゆる「偽りの再認」と関係づけて興味深い説明をしているのはやはり Gusdorf である。彼の説を参照しながら「偽りの再認」について簡単に説明しよう。

「偽りの再認」とは例えば次の様な場合である。「ある女が友人の家を始めて訪問する。ところがその家をどこかで見た気がしてならない。さてその時、友人には瀕死の兄がいた。そして訪問した女の兄も数ヶ月以前にその様な状態に落入っていた。だからこの女は本当は自分の以前のその様な状況を思い出すべきだった。ところがこのような追憶の感覚を友の家に結びつけ、かくしてその家をどこかで見た気がするという幻想を持つ」。又、精神科の臨床尋問でよくある事だが、患者は自分にとって非常に大切な事を語り始める時「もうお話ししましたが」と言いながら話し始める。つまり患者は幾度か話そう話そうと意向していたものだから、意向の追憶と実行の追憶が混同されてしまったのだ。この二例のどちらの場合にせよ、実際には見もせず、行いもしなかった事を、見た、行ったと思いこむ点で「偽りの再認」と呼ばれる。併しそれは客観的な次元から見た場合に偽りであるにすぎず、内的次元から見れば「真の再認」なのだ。こゝには確かに己れの内的状況の繰り返し、現在の自己と過去の自己の一致が存する。ただこの一致が外界の内に誤って定位されるのだ。Proust の「三本の木」の場合もこれに近い体験であろう。「話者」はバルベックで「三本の木」を見て大きな幸福感に満たされる。そして以前も、どこかで同質の体験をした気がしてならない。だが、どこどこか、何時だか解らない。ついにはそんな事なぞ過去になかったのではないかという気がしてしまう。この場合も明らかに内的状況の、自己の本質的生命的解放の繰り返しはあったのだ。ただそれを外界に定位することが出来なくて挫折を感じ、神秘的な感じがするわけなのだ。この様なわけだから「偽りの再認」はその明らかな誤り、又は不確実さの奥に深い生命の眞実性を秘めているわけなのである。

なおこの様な体験と無意志的追憶がその本質において結びついている事を示すものとして Gusdorf は Ribot の観察した例をあげている。以下その例を簡単に紹介しよう。「あるルーマニア人がブカレストの中学の寄宿生だった際、何時も外出禁止の罰を受けていたので、卒業後も嫌な思いなしには母校に行けなかった。さて彼はやがてフランスに行き、中学上級課程に一週間ばかりかよった。ところが教室で何故だか解らないが不安となり、何かを恐れ、先生に恐怖感を抱いてしまうのだった。やがてかなり時がたち、ある時この学校の前を通ると、彼はブカレストの学校の前を通る時に感じていたのと同じ恐れを感じ、飛んで逃げてしまったのである」。cf. Gusdorf : op.cité, pp.458~488

- 5) 「真の現実」は精神によつてのみひきだされ、その現実が精神作用の対象そのもので

あるため、吾々が思念で再創造したもののみを真に知ったといいうる」。Tome II, p.770

- 6) この場面は次の様な前書きで始まる、「……そうした（ゲルマントの方を散歩した際に感じた不分明な）心象の下には意志薄弱のため未発見に終わったが、確かに予感だけはあつた現実がずっと前から死んでいたのだ。だが一度こんな事があつた」と。そしてマルタンヴィルの鐘楼を見て大きな喜びを感じるという文が続くが、それについて次の様な文がくる、「……そうこうするうちに、鐘楼の線や陽を浴びた表面は、まるで外殻でもあるかのように破れ、私に隠されていたものが少しばかり姿を見せて、一瞬前にはなかった考え、頭のなかで言葉の形をとった考えが浮んだ……」と。 Tome I, pp.179~181
- 7) Tome III, p.866
- 8) 「吾々の真の人格が、実生活の行為の与え得ないような表現をそこに見出す一層深い現実が芸術にはあるのだろうか?」。「芸術というものが果して生命の延長にすぎないものであるなら、芸術のために何かを犠牲にする価値があるだろうか。芸術は生命と同じく非現実的なものではあるまいか」。 Tome III, p.158, p.255.